清少納言枕冊子の影響文献「尤のさうし」「絵本朝日山」「吉原大鑑」について

田中重太郎

紫式部の源氏物語と清少納言の枕冊子とは、王朝文学の双璧といはれるが、源氏物語がその成立した平安朝中期以後現代にいたるまで影響した大きさにくらべて、清少納言枕冊子の後代文学その他におよぼした影響は、きはめて小さく、少い。源氏物語には、それが成立したすぐあとに、さごろも・ねざめなどの模倣作品が輩出したり、更級日記の著者のやうな源氏物語渇仰者があり、さらに中世に入って和歌・物語その他さまざまの方面に影響し、謡曲に源氏物と称する数曲があり、また近世以後の文献はあげるにいとまがなく、最近は映画・演劇にいたるまで影響し、その口語訳が谷崎潤一郎の名と文によるところがあるとはいへ、版を重ねてゐることは周知のとほりである。その研究史においても、重松信弘博士の大冊「新攷源氏物語研究史」をはじめ何冊かの単行本を成して足りないくらゐであるのに枕冊子の研究史はまだ単行本になってゐない。その影響も源氏物語に比してあまりにも少い。これは、源氏物語が「物語」といふ伝統的な形態をとり、その内容・文章がこよなくすぐれてゐたのに対して、枕冊子はその内容・文章

に前人未発のすぐれたものがあったにせよ、随筆といふジャンルによってゐたことによるのであらう。近代においても、小説は広く読まれ、しばしば全集になるが、エッセイの全集などといふものは、きはめて稀である。また、広く多く読まれた作品ほど同時代ならびに後代に影響することはいふまでもない。さらに、源氏物語と枕冊子との影響力は、平安朝においてそれを作った作者の主家の運命にも相当左右せられてゐるやうである。

さて、島津久基博士の研究によれば、清少納言枕冊子は、成立当時すでに源氏物語にもその影響をおよぼしてゐるところどころがある（岩波講座「日本文学」所収『源氏物語評論』）といはれるが、その他花栄物語（根合）・宝物集（第二）・無名冊子・古今著聞集（巻十一）・十訓抄（巻七）・禁祕御抄・八雲御抄・明月記などに、その読後感なり引用などが見られる。また、室町時代においては、つれづれ草をはじめ正徹物語・なぐさめ草（正徹）・竹馬抄（斯波義将）・実隆公記などに引かれ、やがて江戸時代になると、犬枕・童蒙先習（小瀬甫庵・慶長十七年版）・尤の双紙（寛永九年刊・同十一年刊・慶安二年刊）・清少納言拾遺枕草紙花街抄（俗枕草紙・僭上納言）・清少納言智恵の板などから、玉かつま・花月草紙その他国学者の随筆にいたるまで相当広く影響を与へてゐる。また、この時代の俳諧においては、「誰かいふ枕艸紙はこの道の宝なり」と賞讃した琴風は、自撰俳諧瓜作（元禄四年刊）に「春は曙」「穐は夕暮」の二歌仙を巻き、「こととなるもの」その他の枕言によって発句を分類撰集し、季範撰の「ささらざ」（元禄五年刊）、寄木撰の「まくら掛」（元禄十四年版）、さては朱拙撰の「初便」、梅丸の「俳諧枕草子」その他の俳句・俳文にも影響が見られるやうである。

なほ、「犬枕」については、数種あり、「清少納言犬枕」と外に題簽があって、内題には「ふてかくし（上・中・下）」とある絵入三冊本は、下巻の奥附に「元禄拾五壬午正月吉辰　武陽書林　平野屋吉兵衛板」とある仮名草子である。これについては、後に改めて述べたい。また、天理図書館の所蔵の古活字本「犬枕」については、つとに昭和十三年

四月号の「国語・国文」第八巻第四号に杉浦正一郎氏の『犬枕について』といふ精細な紹介があり、一部分の写真と全文活字飜刻が行はれてゐて、その清少納言枕冊子からの影響を知るべきである。

ここには、これら影響文献のうち　尤のさうし・絵本朝日山・吉原大鑑の三書について説述したい。

一　尤のさうし

尤のさうしは、決して珍本ではない。このごろでこそ古書目録の類にあまり見かけなくなったが、それでも比較的入手しやすい本である。また、この書は、近世文芸叢書（国書刊行会　第二期）・続群書類従　巻九八八雑部・日本随筆大成（第二期　第三巻）・近代日本文学大系（仮名草子集）・新編御伽草子（下巻）などの活字本で容易に読むことができる。

架蔵の　尤のさうし　に二種ある。どちらも十行整版の大判であるが、一は、下巻末に「寛永甲戌六月吉日書舎中野氏道伴刊行」とある寛永十一年刊本二冊であり、二はおなじく下巻末「慶安弐巳丑年仲春良辰　藤井吉兵衛尉新刊」とある慶安二年刊本二冊である。年号からいへば、寛永十一年（一六三四）は、慶安二年（一六四九）よりも前であるが、架蔵の版本の奥書を仔細に検すると、慶安版の方が刷がきれいであり、寛永版の方の版木が磨滅してゐるやうであって、この刊記のところも「寛永甲戌六月吉日……」とあとで彫ったあとが歴然としてゐる。しかも、慶安刊本の方は、下巻跋文（四十四丁表）の前、本文四十三丁裏の終りに「ふ（婦の草仮名）屋仁兵衛新刊」の一行があり、寛永本にはそれがない。

架蔵　尤のさうし　の題簽は、慶安版に「尤草紙　上(下)」とあり、寛永版には墨書きで後に補ったものがついてゐる。一・二ともに上巻の丁数三十八枚、下巻四十三枚であることには異同がなく、本文にもかはりがないやうである。

上巻の序に

一表

よろこびなかきとしのころかとよ。たれかれあつまりて。かの清少納言が。まくらざうしをまねひてかきたる物あり。その名を犬枕といへるなり。此二枕は。あしびきのやまとうたのむつのたねをあらはし。すゑの世の人のためしとなるべき事をねがひ。言葉すなほにしなたくみ有てこゝろ妙也。右のまき〳〵にかきもらしぬる。ことそぎてかたはらいたき事どもを。とりあつめ。此狂言となせる物ならし。しかるに今はたしきたへの。まくらといふ名をかたどらん事は

一裏

。神慮もおそろし。さはありといへ共。おもかけのいさゝかかよふなるをとて。枕とよむもじの。一方を残して。尤のさうしと名付侍りぬ　（句読点・振仮名・濁点などすべて原本のまま。）

と書名命名の由来を説き、そのあと

尤之双紙目録　上

として

一　ながき物　二　みじかき物　三　たかき物　四　ひくき物　五　ひろき物

六　せばき物　七　きれいなる物　八　むさきもの　九　うれしき物　十　うるさきもの

以下　四十　かへるもの　まであり、　下巻第一丁には

尤之双紙目録　下

として

一　ひく物　二　さす物　三　物のかしら　四　もちいらるゝ物

五　めぐる物　六　まふもの　七　すぐなる物　八　まがれる物

以下　四十　目出度物　にいたる。そして、跋文には、

此尤草紙は或人つれ〳〵の余りに硯に

むかひ筆にまかせて書集ける其心

あまれりやたらすや然を忝　無品親王

御覧有て事たらさるをくはへよろ

しきをたすけ腹に味ひて筆の尻

とらせ給ふとそ

とある。

尤のさうし　の著者は　わからないが、この序・目次・跋を読むとき、枕冊子・つれづれ草の影響をうけたものであることは明らかであらう。このさうしの本文は、前に述べたやうにすでに何回か活字になってるるので、ここに本

文を飜刻することよりも略注を加へたいのであるが、いまはそのいとまがない。試みに上巻のはじめと下巻の一部とを引いておかう。そこに、ものづくしの文体が見られ、平安時代の枕冊子とは、別趣の、謡曲やお伽草子、さては仮名草子の世界が見られるからである。ただし、句読点・濁点などは、原文のままにしておく。

一　なかき物のしな〳〵

一それ漢朝のいにしへ長き事のためしには。堯舜之御代七百年。周之御代八百年。前漢。後漢四百年。我朝にては。神代之むかしすべて八十三万六千八百余歳とかや。今人王之御代と成てもみもすそ河の流ながく。百王万歳の御代ぞかし。をとに聞ても長き物は。かの天竺の石の橋。日本に。宇治橋。勢田の橋。回廊の長きはいつく嶋。三十三間。鎌倉之建長寺廊下。通天橋。天橋立。みほがさき。海士のたく縄。高なはや。青鷺のくび。鶴のあし。山鳥の尾に。鴫のはし。ゑんかうが手に。ざうのはな。うさぎのみゝに。うしのした。神馬の尾かみ。神子の袖。上薦のかもじ。（中略）むくつけ男のひげ。ゑぞがはな毛。文字あまりの歌。催馬楽哥。長哥。短哥。源氏若なの上下。公家の酒盛。連歌席。上手のうつ碁。下手の談義。しんどくの盤若六百巻。正木のかづら。青つゞら。青柳の糸。藤の花ぶさ。永日をよめる哥に

さくらさくとを山とりのしたりおの

なか〳〵し日もあかぬ色かな

又秋の夜のながきをよめる

あしひきの山鳥のおのしたりおの

なか〳〵し夜をひとりかもねん

又すまのながあめ。それよりながきは五月の雨

五月雨のふる屋の軒のつれ〳〵と

いつをかきりのなかめなるらん

北州千年今此御代

長生殿裏春秋富

不老門前日月遅

二　みじかき物のしな〳〵

一すそのまくつぎ。袖ぶくりん。かはばりはをり。よの袴。戸田の小太刀に。長柄のみ。しやう〳〵のうたひ。さかな舞。上手の談義。いとまの状。土竜の四そく。ねこのつら。ましこのはしに。うづらのお。つくりのとつて。ちやぼのあし。夏の夜。冬の日。ふゆうのいのち。電光。朝露。石火。人間五十年はゆめまぼろし

（上巻　第三丁表〜第四丁裏）

四十　目出度物のしな〳〵

一よめ入むことり。げんぶくやわたましの能。初知入に。元三のせち。いきみ玉。ながえのてうしのてふ花がた。正月のかゞみ。松かざり。廿日は具足のしうぎとかや。御産安穏。かみをき。はかまぎ。女のもぎ。子そんはんじやうのうばおふぢ。うけ振舞に。鶴かめや。松と竹とに。やちよの椿。万歳〳〵万々歳

よろつよとみかさの山そよはふなる

あめのしたこそたのしかるらし

（下巻　第四十三丁裏）

なほ　尤のさうし　について一二補説しておきたいのは、このさうしに、数種あることである。これについては、

日本文学大辞典（第六巻）「尤の雙紙」の条で、島津久基博士が

御伽草子　二巻　〔作者〕未詳。烏丸光広との説もある。〔成立〕江戸時代初期。慶長以後、寛永九年六月以前である事は、はしがきに、「慶び長き年」の「犬枕」に倣った由が見えるのと、「寛永九年林鐘上旬　大宮通三条二町上恩阿斎開板」の奥書ある板本があるのとに因っても知られる（犬枕は、元禄十五年刊の好色本「清少納言犬枕」一名「ふでかくし」とは別のもので、今伝はらないが、慶長の小瀬甫庵作「童蒙先習」の一名を古くはさう呼んだのではないかと、柳亭種彦の「好色本目録」清少納言犬枕の条に言ってある）。〔諸本〕古板本は上記寛永九年板（林鐘上旬大宮通三条二町上恩阿斎開板）、同十一年板（書舎中野氏道伴刊行）、慶安二年板（藤井吉兵衛尉刊）。以上三版には挿絵はないが、寛文十三年松会版には絵が入ってゐる。続群書類従巻第九八八・新編御伽草子下巻等に所収。（三九九頁）

と説かれたところでまづ尽されてゐよう。右の解説中の「一名『ふでかくし』」といふ「犬枕」については前に述べたが、天理図書館に古活字本「犬枕」がある。ただこの絵入本については、その姿を知るよしもなかったが、大阪の杉本梁江堂の稀本百種（大正十五年八月刊）に

尤の草紙　著者不詳　大本　一冊

寛永十一年の刊行にして、清少納言の枕の草紙に擬し、枕といふ字の篇を取り、つくりを残して、尤と名付けたる草紙なり。此時代には物語、草紙などを滑稽ものに改作せること流行せしが、本書は此種の物のうちにて、其の先駆をなしたるものなり。（一頁）

と解説してあり、おなじく　稀本百種二（昭和二年八月刊）に

尤之草紙　古雅絵入本　大本　三冊

寛文十三年の刊行にて、清少納言の枕の草紙に擬したる絵入随筆なり。序文の一節に『まくらといふ名をかたとらん事は神慮もおそろし、さはありといへともおもかけのいさゝかゝよふなるをとて、枕のよむもじの一方を残して尤のさうしと名付侍りぬ。』とあり、ながき物、みじかき物、たかき物、ひくきもの、ひろきもの、せばきもの、あをきもの、きなるもの、あかきもの、しろきもの、やはらかなる物、こはきもの、まことなる物、いつはる物、名所誹諧、めでたき物等の対照八十

章を収録せり、本書の絵入本は稀にて、達磨屋吾一の蔵書印あり。（六頁）

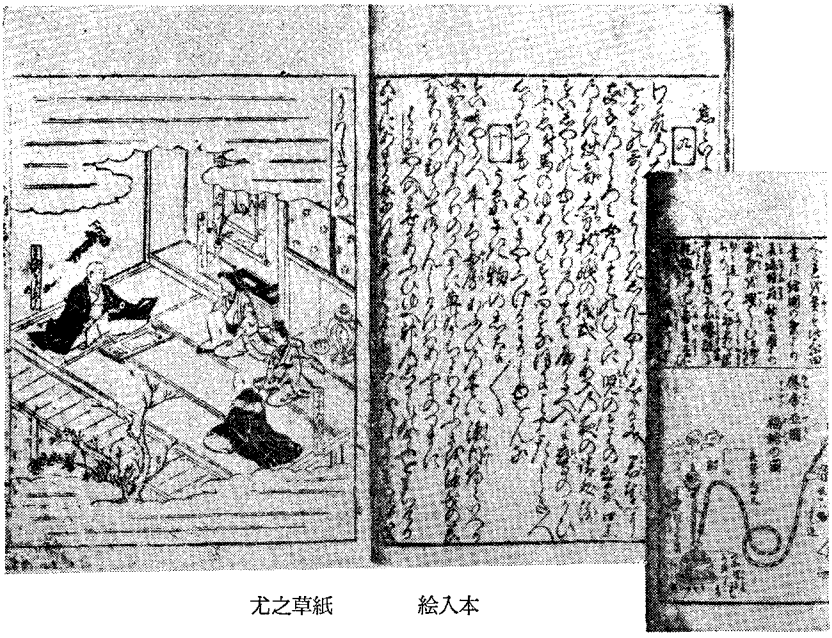
と説明し、口絵写真が出てゐる。

これらの解説によれば、寛永十一年版には　一冊の合冊本があり、これはめづらしくもなからうが、絵入三冊本の方は、わたくしも見たことがないので、その口絵写真を下に掲げてみる。寛文十三年（一六七三）は、改元されて延宝元年であり、他の版にくらべてもっとも後になってゐる。

ところで、この写真によると、この本は、寛永版・慶安版のやうに十行本でなく、十五行本のようである。したがって、全然版を異にしたものであらうが、本文を対校してみると、絵入本の

十　うるさき物のしな〳〵

すいきやう人年より女房あふの巻に源内侍といへる女賀茂のまつりのかへさに車のうちよりあふきを源氏の君



尤之草紙　　絵入本

へ奉りけりひらいて御らんしけれはあふきのつまに

はかなしや人のかさせるあふひゆへ神のしるしのけふをまちける

五十にあまる女なれ共哥よくよみてことを引けるにや源氏　（句読点・濁点・振仮名などすべて原本のまま。）

とあるのを寛永版・慶安版の

十　うるさき物のしな〳〵

一すいきやう人。年より女房。あふひの巻に。源内侍といへる女。賀茂のまつりのかへさに。車のうちよりあふぎを。げんじの君へ奉りけり。ひらいて御らんければ。あふぎのつまに

はかなしや人のかさせるあふひゆへ

神のしるしのけふをまちける

五十にあまる女なれどもうたよくよみて。ことをひきけるにや。源氏……　（上巻　九丁表七行～裏五行）

と比較してみると、句読・用字などが多少異なるけれども、本文そのものには、「一」といふはじめの文字が寛永版・慶安版にあって、絵入本にないこと、寛永版・慶安版には「女房」の振仮名が「にうばう」とあるのに、絵入本には「にようばう」とあることなどの相違しか見られない。もっとも、これらが異なることは、すでに版が異なることであることはたしかである。西鶴本に「女房」が「にうはう」または「にようはう」などとなってゐることと併せ考へておもしろい。尤のさうし　の内容については、稿を別にしたい。

二　絵本朝日山

弘文荘特賈古書目　第三十五号（昭和三十五年三月刊）に

245　絵本朝日山　西川祐信画　元文六年刊　三冊　五、〇〇〇円

半紙判、上巻十六枚、中巻十五枚、下巻十一枚。上巻首にみなもと折江なる人の序一枚、凡例一頁、下巻末に西川祐信の跋一頁、内に折江君なる人の懇望に応じて清少納言の枕草子の意を当世風俗に描く旨を記。あとに京都植村玉枝軒の刊行目録一枚、最後に

平安城　六角通　枕絲軒
堀川通　玉枝軒　寿桜

元文六年辛酉　青陽花朝日

更にそのあとに京植村藤右衛門、江戸同藤三郎、浪華同藤三郎三書肆の連名あり。初版初刷、印刷きわめて美し。紺表紙原装、原題簽。保存極良。（八五頁下段）

とあるのを見て、当時東京へ電話したが、売切で入手できなかった。しかし、わたくしは、この古書目録によって、はじめて「絵本朝日山」の存在とそれが清少納言枕冊子影響文献の一つであることを知った。「尤のさうし」の場合も古書目録で学んだが、この本も古書目録に教へられたのである。

その後、鋭意入手の機会を得ようとしたが、なかなか見られず、最近になって、縁あって急に三本も手に入った。その一は、下巻末に

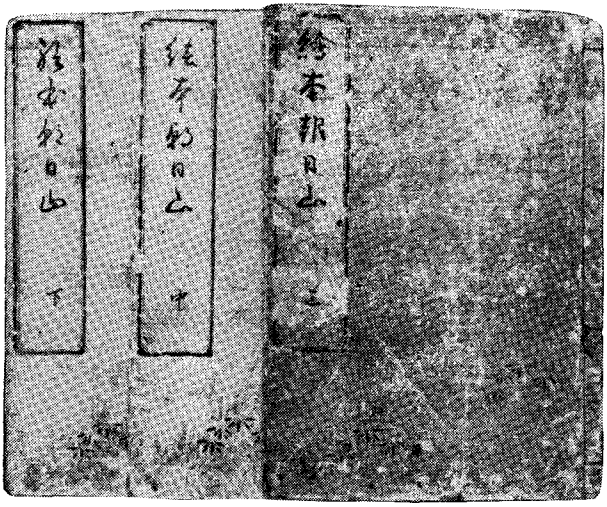
明和九年
辰正月吉日　書林　小川多左衛門
今井喜兵衛　求板

と刊記のある三冊本であり、他は、をはりに

万延元申稔補刻

京都　東六条中珠敷屋町　丁字屋七兵衛

書林　五条通高倉東へ入　菱屋友七



と刊記のある後刷一冊本である。

明和九年（一七七二）は、十一月十六日から安永に改元せられてゐ、万延元年（一八六〇）より八十八年前であるが、元文六年（一七四一）よりは約三十年後である。したがって、「絵本朝日山」の初版は、弘文荘待賈古書目所載の元文版がそれであらうが、その内容は、明和版とかはりがないであらう。明和版三冊本は、各巻題簽の「絵本朝日山」の字体を異にしてゐて（写真参照）、元文版をしのばせるやうである。

「絵本朝日山」は、未だ活字になってゐないものであり、枕冊子影響文献としてはじめて紹介せられるものであるから、前記弘文荘待賈古書目の解説を補ひつつ、すこしくはしく内容を説いてみよう。

上巻第一丁には

画本朝日山

前聞少納言は清原元輔の女にて上東門院に
めしまつわされ才賢世に絶倫女房にぞありける
それがかきつらねをきたる草子の中より此
三巻を見あらはし今様の絵あやなし侍りぬ
猶おゝやけに伝て蘭閨　弄　ものともならぬ
ばふみのはやしのさいはゐのおほきのみ

西川祐信画　信祐

と序があり、下巻第十四丁裏には、

此三巻は清女手沢の存する処の古ざうし
なりけるを折江君なる人もち出ていかにや
今やうの絵にうつして世の児童にも
見せてしがなと頻の求めいなみがたく時と事
とのたがひおほきはかへり見もせず詞によせの
せち成を西川氏の筆にまかせて少納言の
昔を今につぎぬ見ん人此心をしり給へ

とあって、前記「明和九年　辰正月吉日　……」につづいてゐる。

この序・跋の意はさほど難解のものではないから、意は汲める。ただ文飾にもせよ、跋の「此三巻は清女手沢の存

する処の古ざうしなりけるを折江君なる人もち出て……」のところ、「此三巻……」は、この「絵本朝日山」三冊をいふのであって、「清女手沢の存する処の古ざうし」が三冊であったとはかならずしもいへないやうであるが、読みやうによって、「此三巻は……　古ざうしなりけるを……」とも解せる。すなはち、「折江君なる人」所持の枕冊子が三冊本であったと解せるのである。もっとも、「此三巻は……西川氏の筆にまかせて少納言の昔を今につぎぬ……」にまでかかるとすれば、「絵本朝日山」そのものが三巻（三冊）であったことをいったのだと考へられる。おそらくさうなのであらうが、その「古ざうし」もあるいは三冊であったかも知れない。なほ、明和版本の下巻の終りの丁に西川祐信の絵本の広告（京寺町松原　菊屋喜兵衛）が出てゐるが、その表には「絵本倭文庫」一編～六編まで卅巻とあるのを除いて、「絵本池の蛙」以下三十点すべて「全三冊」であることも参考になる。これによれば、やはり「絵本朝日山」そのものが三冊だといふことになる。もっとも、その裏面に三十二種の本の広告があり、そのうち祐信のが十七冊（全十冊が二、全七冊が一、全三冊が二、全二冊が十、全一冊が二冊）になってゐるから、すべて全三冊とはいへないが、中巻の末に、おなじ菊屋の広告で「西川祐信絵本類　三冊物合巻壱冊　全部三十巻」「同右　上仕立箱入云々」とある。

ところで、上巻は、

1　つねよりもことにきこゆる物　元三の車のをと　雞の声　あかつきのしはぶき　管絃の調はさらなり

の文を第二丁裏から第三丁表へ見開きに散らし書きにして、牛車の図がゑがかれてゐる。（次頁写真参照）

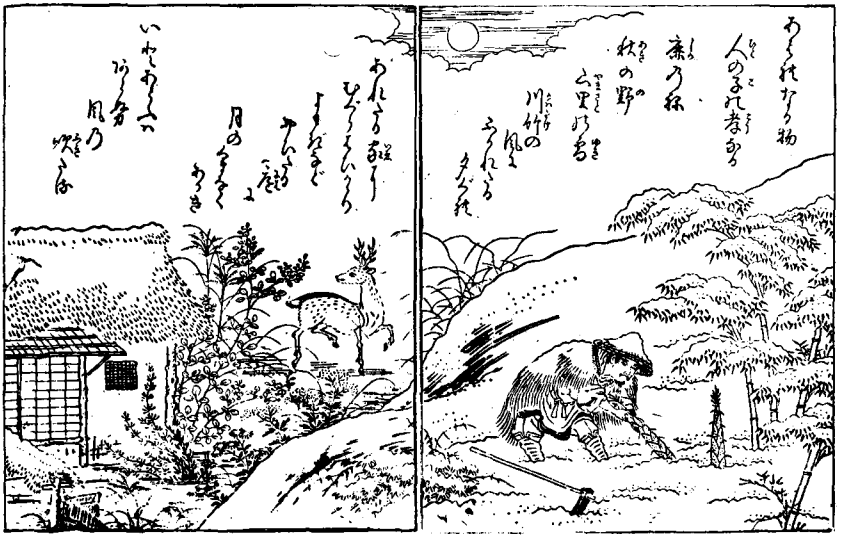
つづいて、

2　あはれなる物　人の子の孝なる　鹿のね　秋の野　山里の雪　川竹の風にふかれたる夕ぐれ　あれたる家に

むぐらはひかゝりよもぎなどおひたる庭に月のくまなくあかきいとあらふはあらぬ風の吹たる

（第三丁裏　第四丁表）

絵本朝日山　上巻　第二丁裏～第三丁表



絵本朝日山　上巻　第三丁裏～第四丁表

の文に対して、山里の雪の中から筍を掘る孝行な男の図に満月と鹿とを配してある。（前頁写真参照）

さらに

3　大にてよき物　家居　菓物　餌袋　火桶　鬼灯　法師　松の木　硯の墨　山吹の英　馬も牛もよきは大にこそあんめれ　（第四丁裏　第五丁表）

とあって、参考に示した図があり、以下左のやうな本文にそれぞれ見開きの絵がある。ただし、16だけは見開きでなく、第十六丁裏にある。

4　みじかくてありぬべき物　頓のものぬふ糸　灯台　げす女の髪うるはしくみじかくてありぬべし　人のむすめの声　（第五丁裏　第六丁表）

5　つれ〴〵なぐさむる物　物語　碁双六菓子　三四ばかりなる児の物おかしふいふ　又最いとけなき子の物がたりなどして笑などしたる　（第六丁裏　第七丁表）

6　昔おぼえてふやうなる物　唐絵の屏風のおもてそこなはれたる　うげんべりのたゝみのふりてふし出たる　色ごのみのおひくづれたる　藤のかゝりたる松の木かれたる　（第七丁裏　第八丁表）

7　たのもしげなき物　一番に勝たる双六　風ふきに帆あげたる舟　心短くて人わすれがちなるむこ　そらごとする人のことなしがほに大事うけたる　（第八丁裏　第九丁表）

8　ちかくてとをき物　くらまのつゞらおりといふ道　思はぬ兄弟　親族の中

9　とをくてちかき物　ふねのみち　男女の中　（第九丁裏　第十一丁表　原本では第十一丁の柱が「朝絵上　〇十一ノ五」とあり、第十二丁にあたるところが「朝絵上　〇十六」以下十七・十八から二十にいたる。結局、十六丁しかないのに、丁数は二十になってゐるのである。）

10　心もとなき物　人のもとに頓の物ぬひにやりて待ほど　遠き所よりおもふ人の文を得てかたく封じたるそくゐ

なんどはなちあくる心　こゝろあしくものおそろしき夜のあくるを待ほど　（第十一丁裏　第十二丁表）

11　せめておそろしき物　夜なる神　隣にぬす人のいりたる　（第十二丁裏　第十三丁表）

12　他にあなづらるゝ物　家の北おもて　つゐぢのくづれ　年おひたる男　淡〳〵しき女　あまり心よきと他にしられたる人　（第十三丁裏　第十四丁表）

13　過にしかたこひしき物　枯たる葵　去年の扇　ひいなあそびの調度　月のあかき夜　又折からあはれなりし人の文雨などの降てつれ〴〵なる日さがしいだしたる　（第十四丁裏　第十五丁表）

14　見ならひする物　あくび　ちごども　なまけしからぬえせもの　（第十五丁裏　第十六丁表）

15　見て心知よき物　知たる人の業の能出来たると　祭のはやし物　又は庭に植たる　菓などの生たるいとうれし　（第十六丁裏）

以上が上巻のすべてであるが、ここにあげられた本文の所在を「校本枕冊子」によって調べ、その段数を示すと、

	段名	伝能因本	三巻本	前田家本	堺本
1	つねよりもことにきこゆる物	一一八	一一一	一八八	一六二
2	あはれなる物	一二三	一一五	一二二	一八五
3	大にてよき物	二〇九	二一九	一七二	一七〇

4	みじかくてありぬべき物	二一〇	二二〇	一七三	一七一
5	つれづれなぐさむる物	一四三	一三五	一三六	一六一
6	昔おぼえてふやうなる物	一六七	一五八	一八六	一二九
7	たのもしげなき物	一六八	一五九	一四六	一三三
8	ちかくてとをき物	一七〇	一六一	一七〇	一三一
9	とをくてちかき物	一七一	一六二	一六九	一三〇
10	心もとなき物	一六四	一五五	一二七	一二七
11	せめておそろしき物	二五一	二四八	一九〇	ナシ
12	他にあなづらる物	二四	二五	一六五	一四五
13	過にしかたこひしき物	三〇	二八	一八七	一四九
14	見ならひする物	二八五	二八七	一八一	ナシ
15	見て心知よき物	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ

となる。

「絵本朝日山」は、枕冊子を「今やうの絵にうつして世の児童にも見せてしがな」としての絵本であるからどこまでも絵画を主とする本であって、枕冊子の本文は従の従たるものといへよう。しかし、その本文の系統・性質を考へておくことは当時の流行を知り得てあながちむだでもあるまい。しかして、右の本文の調査によると、「絵本朝日山」上巻の本文順序は、枕冊子本文の、どの系統本の順でもなく、画師の自由によるものであることがわかる。また、その本文抄出も原本からかなり自由に行はれてゐるし、画家の勝手に作った本文のあることもわかる。たとへば、2あはれなる物　において、原文は「校本枕冊子」で五ページにわたるが、ここにはその一割にも満たない本文がとり出されてゐる。しかも、その段における本文とその順序も、

伝能因本

あはれなる物　孝ある人の子鹿の音（中略）秋ふかき庭のあさちに露の色〳〵玉のやうにてひかりたる　河竹の風にふかれたるゆふくれあかつさにめさましたる（中略）山里の雪（中略）秋の野にすくしたるにそくたちのかこなひしたる　あれたる家にむくらはいかゝりよもきなとたかくおいたる家に月のくまなくあかきいとあらふはあらぬ風の吹たる（三条西家旧蔵本）

三巻本

あはれなるもの　孝ある人の子（中略）秋ふかき庭のあさちに露の色〳〵の玉のやうにてをきたる夕暮あか月にかは竹の風にふかれたるめさましてきゝたる又よるなとすへて山里のゆき　（陽明文庫本）

注　第二類本にはこのあとに「…（中略）又あれたる宿の板間よりもりくる月かけ山里の鹿のこゑやへむくらのはひひろこりたる庭に月のくまなくあかきィ」とある。

前田家本

あはれなる物　孝心ある人の子　しかのね（中略）秋ふかきにはのあさちにつゆのいろ〳〵のたまのやうにてひかりたるかはたけのかせにふかれたるゆふくれあかつきにめさましたる夜山さとのゆき（中略）あれたるいゑにむくらはひかゝりよもきなとたかくをいたるに月のくまなうあかきにいとあらうはあらぬかせのふきたる……

堺　本

あはれなる物　おやのためにけそ（底本以外の諸本「けう」）ある人の子（中略）山里の鹿の声（中略）いゑ（底本以外の諸本「あれたる家」）のよもきむくらはひひろこりたる庭に月のくまなくあかき　あらうはあらぬ風のをと……　（高野辰之博士旧蔵本）

の本文に照合して見てどれにも一致しない。「人の子の孝なる」などといふ本文は現存枕冊子には全然ないものである。「秋の野」の本文も能因本以外にはない。

つぎに、4　みじかくてありぬべき物　の本文を検討してみよう。

伝能因本

みしかくてありぬへき物　とみの物ぬふいと　とうたい　けす女のかみうるはしくてみしかくて有ぬへし
人のむすめのこゑ

（底本は前とおなじ。以下各系統本もおなじ。）

三巻本

みしかくてありぬへき物　とみの物ぬふいと　けす女のかみ　人のむすめのこゑ　とうたい

前田家本

みしかくてありぬへきもの　とみの物ぬふいと　人のむすめのこゑ　とうたい

堺　本

みしかくてよき物　とみの物ぬふいと　けす女のかみ　うるはしくそあるへき　とうたい　人のむすめのこゑ

とある諸本文を前掲4の本文に比較してみると、伝能因本にもっとも近いことがわかり、その他の段の本文も調査したが、三巻本・前田家本・堺本にはまったく無関係のやうである。そして、伝能因本でも、写本類でなく古活字本以後慶安刊本あるいは春曙抄の本文によったのかも知れない。

いづれにしても、「絵本朝日山」の価値は絵にあり、その本文は、この冊子の本文研究上に意義のないものであることは明らかである。「清女手沢の存する処の古ざうし」とは、ゑそらごとではないにして、そらごとのやうであ

る。しかも、15の「見て心知よき物」の本文は、この冊子現存本にはまったくない章段であり、それが「ここちよげなるもの」の段のつもりで選び出されたものであれば、誤解にもとづくと考へざるを得ない。「清女手沢の存する処の古ざうし」とは、もっと通俗的な別の枕冊子の類をさしてゐるのかも知れないが、その正体は上巻の本文からだけではつかむことができないのである。

ついでに、中巻・下巻の本文を順に抄出してみよう。

中巻

1　美善物　からにしき　かざり太刀　（第一丁表）

2　心ときめきする物　からの鏡のすこしくらみたる　美男の車とゞめてものいひ案内させたる　髪あらひ化粧して香にしみたるきぬ着たることに見る人なき所にても心のうち猶おかし　待人なんどある夜雨脚かぜの吹ゆるがすもそれかとぞおどろかるゝ　（第一丁裏　第二丁表）

3　見ぐるしき物　衣の背ぬひかたよせて着たる人　またのげくびしたる人きたなげなる上達部のみくるま　袴着たるわらはのあしだはきたる夏ひるねして起たる最よき人こそいますこしおかしけれえせがたちはつやめきねそれてようせずいほうゆがみてかたみに見かはしたらん程の生るかひなさよ　（第二丁裏　第三丁表）

4　いひにくき物　人のせうそこ仰ごとなどのおほかるを次第のまゝに始より末までいひにくし　返辞また申にくし　はづかしき人の物おこせたるかへり事　成人になりたる子のおもはずなる事きゝつけたるまゐにていといひにくし　（第三丁裏　第四丁表）

5　とり所なき物　みそひめのぬれたる　かたちにぐげにこゝろあしき人　（第四丁表　第五丁表）

6　うちとくまじき物　悪と他にいはるゝ人　さるは善としられたるよりうらなくぞみゆる　日のうらゝかなるに

海のおもてのいみじうのどかにあさみどりのうちたるを引わたしたるやうに見えて　聊おそろしきけしきもなくてさばかりなごき舟の路　（第五丁裏　第六丁表）

7 むとくなる物　相角のまけてゐるうしろ手　大なる木の風に吹たふされて横たはれふしたる　老翁のもとゞりはなちたる　えせものゝ従者勘当　（第六丁裏　第七丁表）

8 なまめかしき物　ほそやかにきよげなる公達の直衣すがた　わかき女房のおかしげなる夏の几帳のしたうちかけて白きあやふたあひ引かさねて手習したる　薄様の草子むらごのいとしておかしくとぢたる　あたらしくもなくていたくふりてもなき檜皮屋に菖蒲うるはしくふきわたしたる　（第七丁裏　第八丁表）

9 かたはらいたき物　聞居たるもしらで他のうへいひたるおもふ人のいたく酔ておなじ事したる　他の起て物語などするかたはらにうちとけて寝たる人　まだ調もひきとゝのへぬに琴を心ひとつやりてさやうのかたしりつる人のまへにて弾　いとゞしうしまぬむこのさるべき所にてしうとに逢たる　（第八丁裏　第九丁表）

10 したり顔なる物　こわきものゝけてうじたる験者　小弓いるに傍の人しはぶきをしまざらはしてさはぐにねんじて音たかく射てあてたるこそしたりがほなる気しきなれ　（第九丁裏　第十丁表）

11 わびしげに見ゆる物　年老たる乞児　さむき折もあつきにもげす女のなりあしきが子をおびたる　雨のいたくふる日ちいさき馬に乗て前駆したる人の冠も　袍も下襲もひとつになりたるいかにわびしからんと見えたり夏はされどよし　（第十丁裏　第十一丁表）

注・十一丁の柱は「十一ノ五」とあり、十二丁の柱は「十六」とある。

12 うれしき物　はづかしき人の歌のもとすゑたづねたるにふとおぼへ居たる我ながらうれしさしぐし為作ておかしげなるもうれし　（第十一丁裏　第十二丁表）

13 あさましき物　さしぐしみがくほどに物につきさへておりたる　人のためにはづかしきことつゝみもなく児も

成人もいひたる　かならず来なんとおもふ人を待あかして　暁がたに只いさゝかわすれて寝いりたるに鴉のいとちかくかうと鳴に見上たればひるに成たるいとあさまし　（第十二丁裏　第十三丁表）

14 くちおしき物　寵愛する人の子うまで年ごろ倶したる　男も女も宮づかへ所などにまうで物へも行にこのもしうこばれ出てやうひはげしからずあまり見ぐるしとも見つくべくはあらぬにさるべき人の馬にても車にてもゆき合見ずなりぬるいとくちおし　（第十三丁裏　第十四丁表）

15 くるしげなる物　夜なきといふものする児のめのと　おもふ人ふたり持てこなたかなたに恨ふすべられたる男わりなく物疑する男にいみじうおもはれたる女　こわきものゝけあづかりたる験者　（第十四丁裏　第十五丁表）

16 こゝろゆく物　川舟のくだりさま　歯黒のよくつきたる　おもふ人の身のうへよきこと聞たる（第十五丁裏）

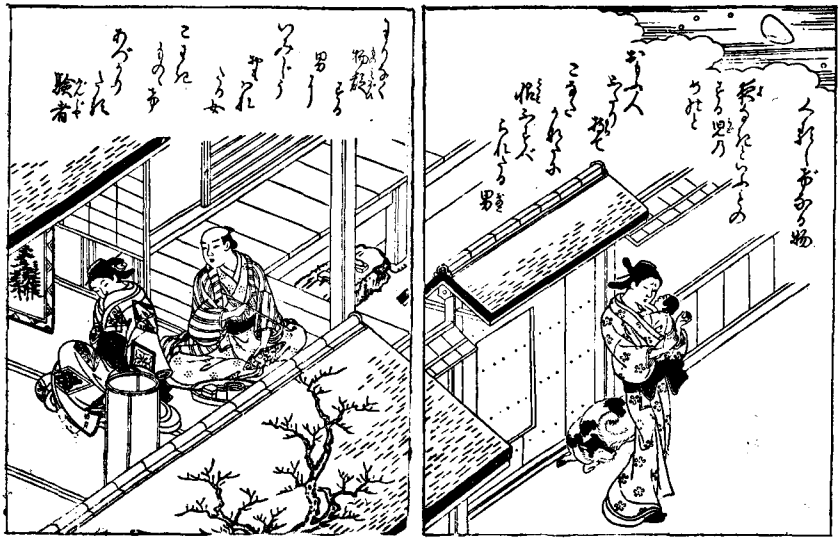
下巻

1 とくゆかしき物　思ふ人のおこせたる文　他の子うみたるおとこ女とくきかまほし　（第一丁表）

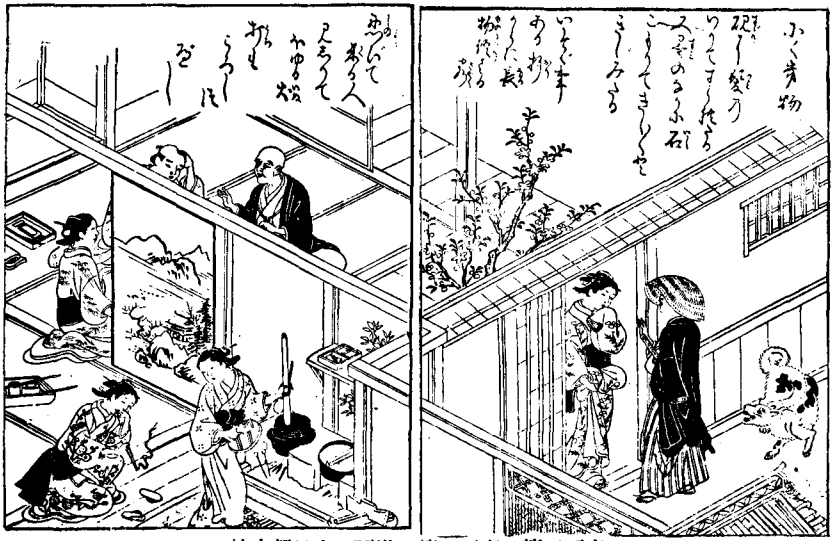
2 有がたき物　しうとめにほめらるゝむこ　又しうとめにおもはるゝよめ　主そしらぬ従者　物語集などかきうつす本に墨つけぬ事　よき草紙などはいみじう心してかけども必こそきたなげになるめれ男も女も法師もちぎりふかくてかたらふ人の末まで中よき事かたし　（第一丁裏　第二丁表）

3 にくき物　硯に髪のいりてすられたる　又墨のなかに石こもりてきし〳〵ときしみたる　いそぐ事ある折からに長物語する客　忍びて来る人見しりてほゆる犬打もころしつべし　（第二丁裏　第三丁表）

4 さはがしき物　はしり火　板屋のうへにてからすのときの産飯くふ　遠きところ他の国より家のあるじのぼりたるはさはがしくいとにぎはし　（第三丁裏　第四丁表）



絵本朝日山　中巻　第十四丁裏～第十五丁表



絵本朝日山　下巻　第二丁裏～第三丁表

5　唯過にすぎる物　帆あげたる舟　人の齢　春夏秋冬　（第四丁裏　第五丁表）

6　きたなげなる物　雀の子　ねずみのすみか　油いるゝ器　すゝばなしありく児　早朝手おそくあらふ人　（第五丁裏　第六丁表）

7　すさまじき物　ひるほゆる犬　春のあじろ　待人あるに夜更てしのびやかに門を　搞ばすこしむねつぶれて人出してとはするにあらぬよしなき者の名のりして来たるこそすさまじといふ中にも返〳〵すさまじけれ　（第六丁裏　第七丁表）

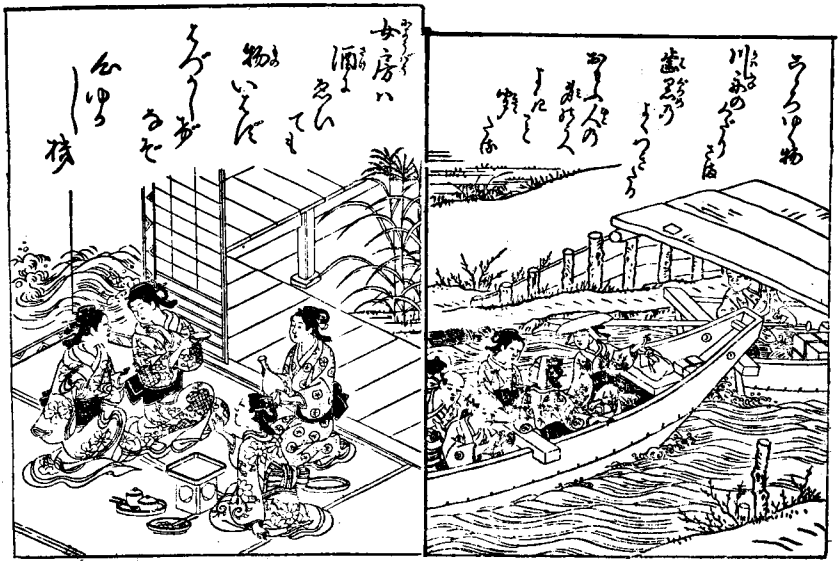
8　むさ〳〵しげなる物　ぬいものゝうら　猫の耳のうち　ねずみのいまだ毛も生ぬを巣よりまろばし出たる　きよげならぬところのくらき　ことなる事なき人のちいさき子どもあまたもちてあつかひたる　（第七丁裏　第八丁表）

9　たとしくなき物　くろきとしろきと　夏と冬と　若きと老たると　人の笑ふとはらたつると　おもふとにくむと雨と霧と　おなし人なからも心ざしうせぬるはまことにあらぬ人とぞおぼゆるかし　（第八丁裏　第九丁表）

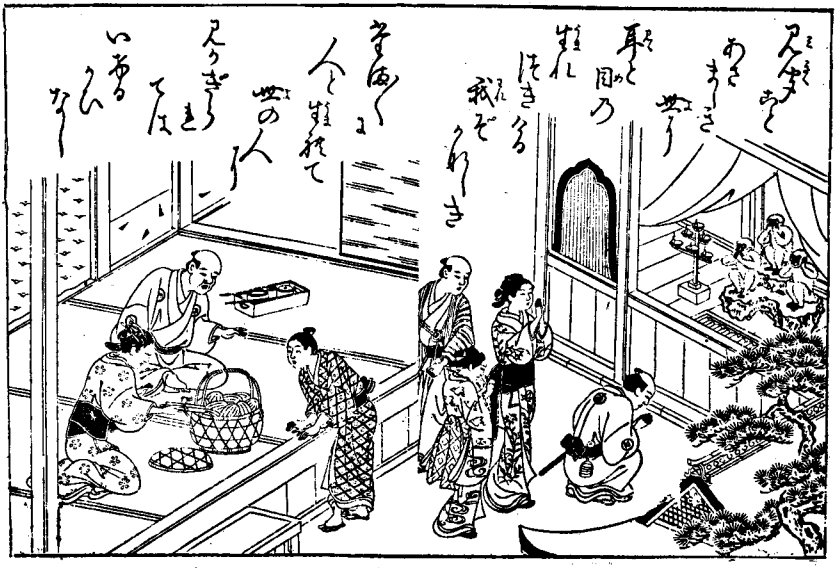
以上で本文はすべてであるが、それが画師によってかなり自由に改められてゐることは　上巻のところで指摘したとほりである。それは、下巻の3にくき物・8むさ〳〵しげなる物　など有名な条で、「いそぐ事ある折からに、長物語する客」とある箇所を一読してもわかることである。「長言するまらうど」を「長物語する客」にしたり、「むつかしげなるもの」を「むさ〳〵しげなる物」に改めてゐるのでもはっきりする。しかし、とりかへしていふが、「絵本朝日山」の本領は絵にあるのであるからその本文をわかりやすくしたものと考へるべきであろう。祐信の画風については、ここに説かないが、枕冊子の文を近世風に写した見本といふべきものを各巻から二三図づつ掲げておいた。その配合の妙を御覧ねがひたい。

なほ、以上本文飜刻をしたのは、明和版の三冊本によったのであるが、万延版の一冊本には、中巻こゝろゆく物のつぎに左の四丁があることは注目すべきことであらう。しかも、これは、柱にこそ上巻・下巻に「都絵上」「都絵下」とあり、中巻に「都絵中」とあるやうに、この部分にも「都絵中」とあるが、この部分はまったく枕冊子とは関係のない文であり、既掲弘文荘待賈目録に見える元文版の紹介に「中巻　十五枚」とあるのに丁数があはないから、この「万延元申穐補刻」版にだけ入ってゐるものである。参考のために、それの16からのつぎ目と下巻へのつぎ目までの全文とを写真凸版にしておく。つまりこれだけが補はれてゐるわけである。この中巻のつぎ目のところを御覧になればすぐわかるが、「こゝろゆく物　川舟のくだりさま……」と「女房は酒にゑひても物いはずはづかしげなぞ心ゆかしき」とは、文字の大きさがちがひ、濁点のうちかたが異なる。枕冊子関係の本文の濁点は普通の黒い濁点であるが、補った部分のは、。を二つつけたものである。そして、補った部分の詞は道歌らしきものであることは、一読して明らかであらう。しかし、これらの画も祐信の絵であることは疑あるまいから彼の画本の一部がここにまぎれこんだのであらう。また、中巻の終から上巻へつづく「道を説文字を口にいひながら……」と「とくゆかしき物　思ふ人の……」のところも、そのけぢめがはっきりしてゐる。（五七頁写真凸版参照。）ただ一冊本のことであるからその間にしきりはない。

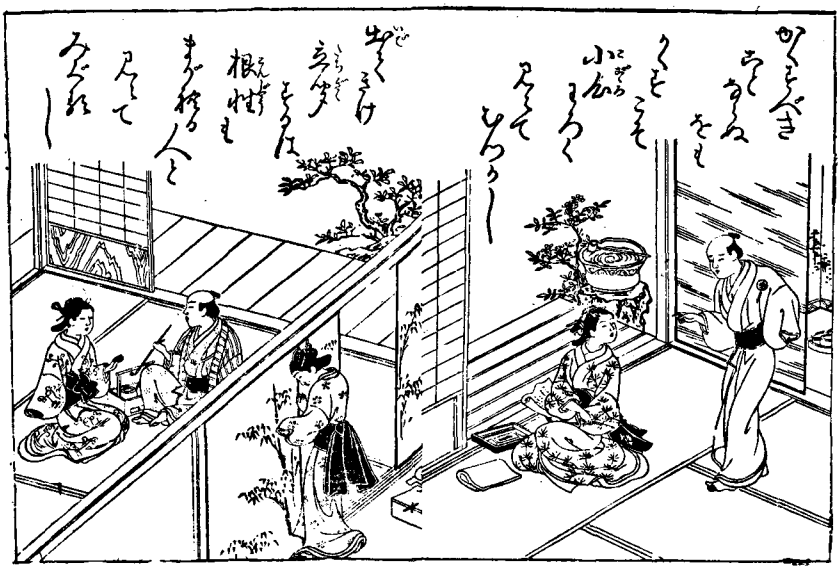
絵本朝日山の元文版の表紙は紺表紙であり、題簽がついてゐるよしであるが、これはまだ管見に入らない。近世の本でも原題簽のついたものはなかなかないものである。



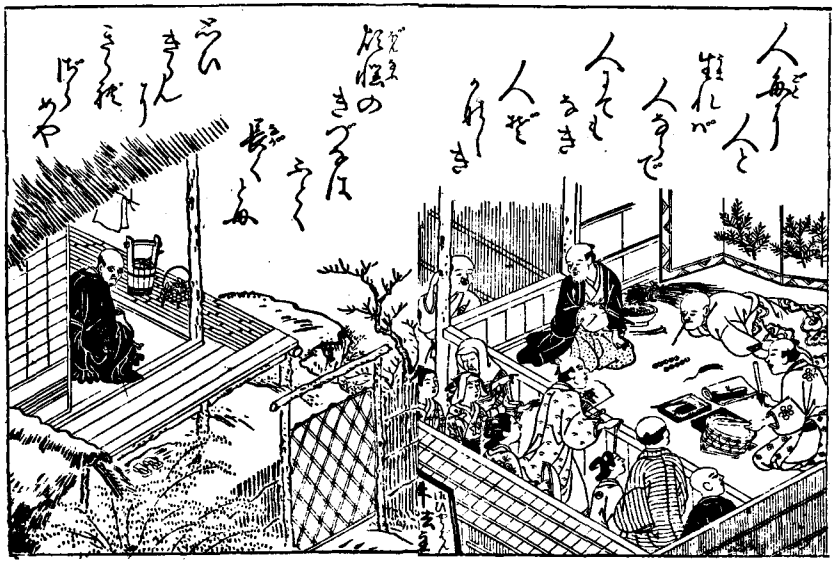
絵本朝日山（万延版）　中巻　補入箇所



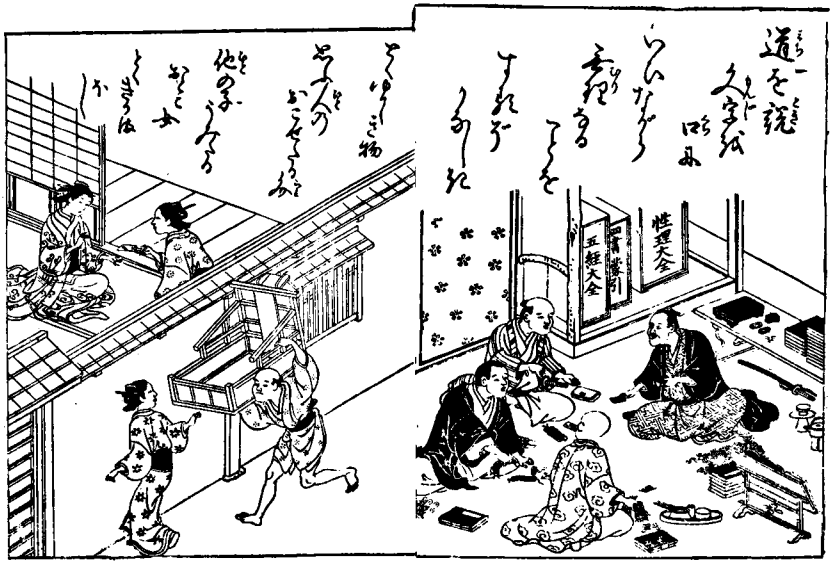
同　　上



絵本朝日山（万延版）　中巻　補入箇所



同　　上



絵本朝日山（万延版）　中巻　補入箇所

注　上の「とくゆかしき物……」から下巻第一丁になる。これが　下巻のはじめである。補入の箇所と周囲の枠の大きさ、高さ、広さの違ふことに注意すべきであらう。

三　吉原大鑑

江戸時代の文献に「吉原物」と称する一連の作品があり、吉原大雑書・吉原鏡・吉原源氏五十四君・吉原雑話・吉原大豆俵評判・吉原三茶三幅一対・吉原大全新鑑その他多くの「吉原物」が知られてゐる。ここに紹介する版本「吉原大鑑」も江戸末期のものながらその一つであるが、それは明治以後活字本になつてゐないやうである。

「……鏡」「……鑑」といふ書名は、源氏大鏡・源氏小鏡をはじめ中世以後多いが智恵鑑・吉原鑑、色道大鑑などといふ名は江戸時代において・評判記・細見の書名として用ゐられてゐることは周知のとほりである。

吉原鑑　一冊は、万治四年（一六六一）刊行せられた絵入本で稀覯本に属する。わたくしは、未だその実物を見たことがないが、霞亭文庫旧蔵本が「弘文荘待賈書目」第三十二号（昭和三十三年十一月刊）に写真四枚とともに紹介せられ、紙数三十八枚の中形本（縦一七・〇糎、横一三・七糎）に当時二十五万円の売値がつけられてゐるのである。この本は、例の江戸時代文芸資料（図書刊行会　大正五年九月刊）第四に

一　吉原鑑一巻　　万治三年の刊本である。吉原細見の元祖である寛永十九年刊の「あづま物語」を除いては、吉原物中の最古の部に属す。当時の名ある遊女の姿絵を出して、それに手管の名目を挙げて居る、これ又江戸時代の特殊文芸研究の絶好資料たるに背かない。前者「諸分店風」の如きは、全く本書を粉本として啓発せられたものに相違ない。原本は紙数三十八葉の美濃半切の小形本で、鱗形屋の蔵版である。（同書　緒言　八頁）

と解題せられてゐる本と内容がおなじもののやうである。「弘文荘待賈古書目」の説くところによれば、「吉原鑑は、万治三年九月と、同四年正月と二回出版された。両者を比較すると、序文、細見図、所収の太夫の名・図像・問答の

文等は相等しく、巻末の刊記の文も同様である。只三年を四年に改め、『うろこかたや新板』とある八字を埋めて、黒地に刷りつぶした点が異るのみに見える。更に詳検すれば、字形に微細な差異が認められるのみならず、画像には三年版にない。上げ畳風の敷物が加えられて居る点に顕著な相違があり、二つの板は、わづか四ヶ月を隔てるのみでありながら、全く別に彫刻されたものである事が判る。……」(同書八一～八二頁)とあるが、その内容にかはりはないやうである。

さて、ここに紹介する「吉原大鑑」は、遠く「吉原鑑」の影響下に成った本とはいへ、それとはまったく別の本であり、「吉原大鑑」のやうな珍籍ではない。また、わたくしは、このやうな方面について何も知らない、いはば、門外漢であって、その内容を説く資格もない者である。ただ、書名が似てゐるので誤解のないやうに贅語したのであり、またこの小稿は、吉原大鑑そのものを説くために書いたものでなく、その中に清少納言枕冊子の影響とおぼしき箇所があり、これはまだ世に知られてゐないやうなので、紹介しておかうと思って書いたのである。

吉原大鑑は豊芥子(からし)こと石塚重兵衛の編著に成る二巻四冊、別名を「今昔吉原大鑑」といふ。日本文学大辞典によれば、守随憲治博士の解説で「『吉原大全』に因み、その補遺の意を寓す。吉原の歴史、名妓の伝記等を記す」とあるが、架蔵本は、その初篇で縦約十八センチメートル(五寸九分)横十二センチメートル(三寸九分六厘)の美濃半截二冊本で、上巻第一丁に

人のたうときいやしきやみな」うまれえたるところなりよろ」つのひとその職に居て世の」なかにしらるゝことよの常」のことにあらすされは遊君と」なつては遊君の職をもて」その名たかからむこそあらま」裏ほしけれこの大かゝみにのする」ともからはちりにし花の匂」ひうせすして色香をいまに」つたふるをおもふに」猶ふるき」世のしたはしきなり

注・」は、各行の終を示す。

天保五甲午の春　応需　[illegible]

の序があり、下巻末第十八丁裏に

僕

北郭の事跡をはじめ、三浦の」高尾薄雲、其余名君の伝を」集め、号て吉原大鑑といふ、此頃」友人南総舎、梓に鐫むと切に乞」ども、十九丁裏二百歳のむかしより、諸先」生の作意多く、殊更大全に委」く、艶花清談に具なる事也、」頗世間の譏を恥と、否めど更」に肯ぜず、是非なくこれを彫」板とす、嗟大方の君子。その拙」なきを許し給はむ事を」乞のみ

癸巳時雨月　乾隠士述

と跋がついてゐる。豊芥子石塚重兵衛には、日本文学大辞典によると、巽隠士・集古堂・鎌倉屋の別号があるといふが、「乾隠士」も別号の一つであらう。深川の巽に対して、吉原の乾をもって名づけたものと考へられる。石塚重兵衛の著としては、「歌舞伎年代記編」「岡場遊郭考」「巽大全」などが有名である。なほ、架蔵本「吉原大鑑」に二種あり、前に大きさを紹介した本は、天保五年（一八三四）の版（天保五年は甲午である。癸巳は、その前年天保四年である。）らしいが、惜しいことに題簽を墨で書いた改装本で下巻第十三丁が缺けてゐる。この本は、「吉原大鑑初編巻之上」と内題があり、「東都豊芥子撰集」とある。いま一本は、合本一冊で縦十七・二糎（約五寸七分）、横十一・八糎（約三寸九分）、後刷本で、「今昔吉原大鑑初編」と貼り題簽があるが、内容はおなじである。

「吉原大鑑」第二丁は初編目録であり、

○吉原開基の次第　○五町の名の謂れ　○吉原場所替
○丁と唱る故事　○二本堤の文字　○同傍爾杭の事

○片葉の芦　○左近原　○見返り榎
○五十間衣紋阪　○田面行灯　○鉄漿堀
○編笠茶や　○水吐尻迄間数　○大門番人規定
○通ふ神の社　○五丁町河岸の事　○局長屋の名
○七軒其外仲町巨細　○大夫の事　○格子女郎
○散　茶　○埋　茶　○局女郎
○端女郎　○小格子　○切見世
○新　造　○突出し　○禿
○雇　禿　○遣　手　○若　者
○不寝番　○男　芸者　○牽　頭　付詩文
○昼夜見世　○引ケ　○後　朝
○昼仕舞　○居　続　○願三ケ条
○初会裏三会　○惣　花　○諸訳百物語
○薄雲伝　○大隅伝　○濃紫伝　二代目
○薫　伝　○九重伝　○紀文伝
巻中総標目　終
（振仮名・濁点などすべて原本のまま。）

とあるが、初編巻之上は「諸分百もの語」で終り、「太夫薄雲伝」からが巻之下になってゐる。そして、枕冊子の「ものづくし」がこの「諸分百もの語」に見えるのである。すこし長いが、いま原本の行数・字数のまま活字に移してみると、つぎのやうである。

十七丁表5

諸訳百もの語　　籬月堂金葉作

長きみじかき芦の葉のしげりあいたる星の月朧〳〵、見えつ隠れつ通ひ路のうちのたはむれにいやなこと嬉しき事を命毛の先にいはせて残りし品はまこと

十七丁裏

心任せしを集めてちよつと枕の音きせよと　いひたし

○長きもの　日本堤　ぬらしの口舌

夜見せの籬ぶし　ふらるゝ夜

○短きもの　しみてあふ夜　はじめての文

○見たきもの　女郎の日記付　女郎の誠

後のあしたのとの文　むごき女郎のなれの果

○聞たきもの

かくすまぶの客　噺す女郎のうわさ

十八丁表

○おかしきもの

ふられてつなぐわび言　禿をくどく性わる

隣坐しきのむつ言

○おもしろきもの　なじみの居つゞけ　内証のまぶ

思ふ中の恋いさかひ

○せかるゝもの

初会にさゝぬ盃　帰る朝のそら寝入

外の知音の噂ばなし　小袖に付るてきの紋

○気味のよきもの

十八丁裏

女郎の意気地　いきる女郎

○静なるもの

水あげの新造　初会の座しき付

大夫おりの格子

○手のよきもの

時花女郎の寝道具　太鞁にいはする無心

○手のわるきもの

茶やできらする横はん　雨中の散茶料理

うれぬ女郎の物日のおし売

十九丁表

○気のどくなもの

しみた夜の火事　花にしらぬ切小ばん

○心よきもの

居つゞけの夜にふる雪　後からもらふ頭巾

○いやなもの

女郎のねあせ　馴染ぬさきの焼ぎせる

客のさめはだ　土手であふ親るい

歯をみがゝぬ客

○よごれるもの

十九丁裏

客の鼻のあな　ぞんざい女郎のたばこ盆

○笑止なるもの

襟に紙あてる女郎の一座　寸一分の夜雨

売れぬ女郎のねまきの無心

○見ぐるしきもの

女郎の口明ての昼寝　（中略）

○うるさきもの

女郎の勝手ばいり　初会の耳そうだん

○むごきもの

二十丁表

売れぬ女郎の年あけ　姉女郎の禿せつかん

○にくきもの
　やりてのにんさう　女郎の大口
　ぎうが不分別
○たのもしきもの
　身うけする女郎のいきぢ
○愚痴なるもの
　屋かた衆　年寄たる客　いくじなき酒酔
○げびたるもの

二十丁裏

　物まへを遠ざかる客　三人一坐のらうそく
　やりてにつるゝ女郎　両方用ひ局あんどう
○待どほなるもの
　年あきを待けいやく　初会の床入
○実らしきもの
　客にはなす親ざと　おさな名
○うそらしきもの　口舌の涙
　諸わけ百物かたり　畢

これらについて、注解めいたものも施したいが、予定の紙数を相当超えたのでまたの機会にしたい。

以上「尤のさうし」「絵本朝日山」「吉原大鑑」の三書における清少納言枕冊子の影響を調査紹介し、今後の研究に資した。この時代の作品にはこれ以外に「犬枕」「花街抄」など枕冊子影響文献としてより重要なものもあるが、前者はすでに「国語・国文」誌に、後者は「近世庶民文化」誌にそれぞれ全文飜刻せられてゐるので、志ある人はそれを参看せられるがよく、ここには、しばらくこの三書にとどめた。なほ、わたくしは、前述したやうに江戸文学、ことにかうした仮名草子・絵本の類にまったく暗い者であるうへに、にはかにこれをまとめたためその解説などに大きな誤ををかしてゐるところがあらうが、ここにはただ枕冊子の影響部分を紹介しようとしてのことであるから、おゆるしねがひたく、資料として利用していただければ幸甚である。（昭和三七・四・一三）

（本学教授　国文学）